



東北大学附属図書館報 木這子

BULLETIN OF
THE TOHOKU UNIVERSITY LIBRARY

URL <http://www.library.tohoku.ac.jp/>

- 木這子(きぼこ)とは東北地方の方言で、こけしのこと。小芥子這子(こけしぼうこ)-

目 次

○中世後期の手写本制作 - 15世紀におけるハーゲナウのラウバー工房 - ... 1	○こらむ.....16
○工学教育・学習を支援する電子ブックの導入 ... 11	○連載「江戸の遊び - けっこう楽しいエコ レジャー」を巡る話題から(2) よむ楽しみ.....17
○平成18年度東北地区大学図書館課題検討ゼミ ナール開催報告.....12	○附属図書館の概況.....21
○『東北大学生のための情報探索の基礎知識』 人文社会科学編2007, 基本編2007を刊行.....13	○会 議.....23
○図書館講習会の新機軸 - 工学分館講習会, 2年間の試み - 14	○人事異動.....24
	○編集後記.....24

中世後期の手写本制作

- 15世紀におけるハーゲナウのラウバー工房 -

学術資源研究公開センター助教 小 川 知 幸

はじめに

「少し離れたところに、^{ルブリカトーレ}写本装飾家マグヌス・ダ・イオーナの姿が見えた。彼はいま皮表紙を軽石でこすり終わったところだ。石灰で柔らかくしておいてから、定規を当てては、表面を磨いてゆく。その隣には、ラバーノ・ダ・トレドがいて、板の上に羊皮紙を貼り、縁に印をつけながら、両端に小さな穴を、縦にいくつもあ

けてゆく。つぎに穴と穴とを結んで、鉄筆で横に、細かく線を引いてゆく。まもなく二枚の紙片は、さまざまな色彩と模様とで埋め尽くされ、
たちまちにそれは、敬虔な文字の織物と化してゆく」(ウンベルト・エーコ(河島英昭訳)『薔薇の名前』)。

15世紀半ばに活版印刷術が発明されるまで、中世ヨーロッパの書物は人の手で筆写される手

写本 (Handschrift, manuscript) がその大半を占めていた。それは文字だけで構成されたり、あるいは飾り文字や挿画を組み込まれて豪華な装飾写本となる場合もあったが、たいていは修道院の^{スクリプトリウム}写字室で制作されていた。修道院にとって写本制作は教育であり、一種の労働義務でもあった。しかしそれは何といても教会の財産を殖やすことであり、神を讃えることにほかならなかった。羊皮紙でつくられた手写本は一冊につき十数頭のヒツジを必要としたうえに、完成まで数カ月から数年を要したため、それだけ高価で稀少なものであった。財政難の修道院は、いざとなれば写本を売り払うことで当座をしのごうこともできた。

書物の機能の変化

ところで、アイゼンステインは、『印刷革命』において、「手書き文化の本質そのものが変動の激しい、むらのある、多様なものであったために、長期にわたる傾向がほとんどたどれず、手書き文化の状況に定量化はなじまない」と述べている。もちろんこれは、活版印刷のもつ、情報の保存性・定着性を重視する彼女の立場からすれば正当な主張であるが、近年、複製技術の改良、「大量生産」の出現、販売網の拡張などといった側面が手写本の時代においても注目されるようになると、これまでの、写字室から活版印刷への移行というイメージそのものが決して「革命」的なものでなく、社会的要請や読書行為、あるいは書物の機能の「変化」として理解されねばならなくなってきたように思われる。

そこで本稿では、手写本制作の変遷をたどりながら、15世紀のドイツ語圏でもっとも生産的であった写本工房の一つであるディーボルト・ラウバー (Diebold Lauber) の工房を取り上げ、その手写本制作の「現場」をかいま見ようとする。この工房に由来する最古の手写本は

1427年に制作されており、工房の活動自体は1470年まで続いた。この40年以上におよぶ活動期において制作された手写本は、現存するものでおよそ80点を数え、ドイツの装飾写本の制作拠点としては最大規模である。

エルザス (アルザス) のハーゲナウ (Hagenau) 城に拠点を置いたこの世俗の工房の手写本は、フランスやブルゴーニュ、ネーデルランドなどの豪華写本がおもに美術史の分野において検討されるのにたいして、テキストと装飾 (挿画) が一体化されており、また均質な製品を長期にわたって大量に供給したという点でも、まさに書籍印刷の先駆者とみなされうるのである。

8世紀から14世紀までの手写本制作

修道院の写字室

さて、手写本の制作拠点は長い間修道院にあり、現存するヨーロッパ最古の装飾写本が7世紀の終わりに制作された聖ヨハネの福音書であったことからわかるように、少なくともこの頃から13世紀までは、修道院の^{スクリプトリウム}写字室がほぼ唯一の写本工房であった。当初は黙読の技術が存在せず、一人の読師にたいし、複数の写字生が一句一句聴き取りながら筆写作業を進めていたが、しかしこれは当然写字生の未熟、聞き違い、怠惰などの理由から多くの誤写を生みだすことになった。そこでかれらは右手に鷲の羽根を尖らせたペン (キールと呼ばれる) をもち、左手には小刀をもっていた。あるときはペン先を削り、またあるときは羊皮紙の誤写した箇所を削り取るためである。

このような口述筆記は、形式上は一種の大量生産方式といえるかもしれないが、要するに朗誦の伝統にもとづく共同行為にほかならなかった。圧倒的に声の支配する世界から、その断片を文字に落とし込む作業である。この声の支配は世俗の世界ではより顕著であり、たとえば国

王は、かりに文字が読めたとしても、決して自分で読むことはせず、祐筆の司祭などに朗読させるのをつねとした。したがって俗人からみれば筆記は卑しい者どものすることであり、識字はいわば恥であった。俗人の長たる君主ともなれば、読むのではなく語ることが「力」の主体としての自己を誇示する手段なのであった。

しかし修道院ではやがて、二者間の声のやりとりから、個人的に「読む」行為が区別されるようになる。12世紀にソールズベリーのジョンは、「読む」legere という語が「講読」prelectio と「読書」lectio に分けられるべきだと述べている。さらにサン＝ヴィクトルのフーゴーは、「凝視する」inspicere という語により、文字を視覚的にとらえる行為を表現している。この頃写字室の書写台も、手元に原本をおくことができるようになり、写本を聴覚ではなく視覚的に筆写・複製する技術が普及する。同時に、手写本のテキストそのものにも、彩色された装飾大文字などが登場し、テキストを視覚的に構造化して記憶をたすけ、誤写を防ぐような工夫がほどこされるようになった。冒頭の引用文は、その当時の様子をよく表しているといえよう。

大学：ペシア・システムによる大量生産

こうして13世紀になると、テキストはイメージと融合しはじめる。手写本は「読みやすい」ものとなり、集団的行為としての「講読」にも影響をおよぼすことになった。1259年にパリ大学は、講読にもちいる著作の写本を、可能であれば学生自身も持参するよう推奨している。教師が壇上で注釈書を読み上げると、学生はその原典の写本を黙って目で追いながら、必要ならば余白にメモをとった。

この写本持参の規定は、もちろん蔵書の貸し借りによっても実現可能であったが、手写本的大量需要を引き起こした。パリ大学では、「ペシア」pecia とよばれる一種の大量生産システ

ムによってこの需要を満たそうとした。

ペシアとは、狭義には書冊の折り丁^{ビース}のことであり、大学当局の許可を得た書籍商^{リブラリイ}が、原本を1冊4葉、すなわち8ページ分の分冊形式に分解して（というより未製本のまま）それぞれに番号を付し、これを希望する学生に有料で貸し出すというものである。借りた学生は手ずから転写するも専門写字生に依頼するも自由であったが、ともかく順番に借り出して全体を複製した。このように小さな分冊にすることで、別々の学生たちに同時に貸し出すことが可能になり、並行作業によって、一度により多くの原本を複製させたわけである。

ペシア・システムのメリットは、大学当局が厳格に原本を管理したうえで、その原本から同時に複数部を転写させることにより、誤写の少ない、制作期間の短い写本を大量に制作することにあつた。じっさいにペシアを示す「p」の記号の記された写本が数多く発見されている。しかしながら、その効率性に疑問符をつける向きもある。宮下志朗氏は、「あるテキストは57分冊からなっていて」、「一分冊に一週間として、一年でも写し終わらない」と述べている。

たしかに、学生が借り出して転写したあとの校正作業にまで当局の監視は行き届いておらず、完成された写本が原本にたいする厳格なコピーであったという保証はない。また原本のすべてのペシアを借り出し、完全な複製を作りあげたかどうかも疑問である。すでに大学における講義は原典全体の通読を必須とするものではなく、むしろポイントを押さえて学習することが科目修得の近道になっていた。詞華集や約説集の普及がこれを裏づけている。しかも、この頃の筆写はいまだ高価な羊皮紙の上で行われていたことを忘れてはならない。ある試算によれば、一つの写本を完成させるには当時の大学教授の年俸の4分の1から3分の1ほどにもぼる費用がかかったという。

読む技術の変容

ペシア・システムは、14世紀後半になると廃れてしまう。その原因はさまざま挙げられるが、とくに黒死病との関係を見無視することはできない。またたく間にヨーロッパ中を席卷し、総人口の4分の1を死に至らしめた黒死病は、とくに都市部において惨禍をきわめ、大学の人口動態を激変させた。学生数が減少して、いきおい学習到達水準が下がったのである。かれらは原典を読むよりも約説集などの要旨集を好んだ。一方で、フェーブルとマルタンは、15世紀半ばの Пари に「4名の大書籍商の監視の下に置かれた24名の 原本貸出商 が、各学部用に必要不可欠な古典の筆写を引き受けていた」として、ペシアの復活を示唆しているが、この点については、ジャクリーヌ・アメスの興味深い指摘を紹介するにとどめたい。「各層の勉学において欠かせなかった書物と種本の不足の問題は、ヨーロッパを襲った黒死病の後、14世紀後半に自然に解決を見たことを付け加えておこう。とりわけ被害を受けた都市部には勉学を志して知識人たちが集中していたので、教授や学生が大量に亡くなり、その結果多数の書物が空いたのである」。

つまり、これ以上余計に書物を複製する必要がなくなった、というのだ。

いずれにせよ、14世紀に都市と大学において手写本の大量需要が発生したこと、そのコンスタントな需要見込みに対応して書籍商が販路を確保したこと、そして手写本制作の場が修道院から都市に決定的に移行したことが重要である。とくに写字生はもはや修士である必要はなく、大学から続々と識字層が生まだされて市井に溢れていた。また、自由な黙読が可能となり、読書は私的な行為になるとともに、約説集や目次や洗練されたインデックスなどによってテキストが高度に構造化され、通読せずとも、読みたい箇所を随意に引き当てることができる

ようになった。

長期的停滞と革新

ところで、14世紀から15世紀にかけてヨーロッパは長期的停滞にあったといわれるが、この時代にも文化的遺産の継承は途絶えることなく、いくつかの技術的革新と経済的構造変動をつうじて書物の時代への扉を開きつつあった。

まず、人口減少によって各地に廃村が生じたが、人々は都市に移り住み、同時にぶどうや麻の効率的な栽培法が開発された。都市では商人が手形や複式簿記をつくり、遠隔地との取引のために活発に通信し、銀行業を発達させた。フィレンツェのメディチ家やアウクスブルクのフッガー家はこうした部門を掌握して、当時ポヘミアやハンガリーで発見された鉱山などに投資した。人文学者ゲオルク・アグリコラがその著書『デ・レ・メタリカ』において、急速に発達した鉱山技術をつぶさに観察し、体系化しようとしたのもちょうどこの頃である。イタリアとの商業的な結びつきによって南ドイツ諸都市が発展し、さらに15世紀前半にはライン河流域がヨーロッパを南北につなぐ交通路をほぼ独占して、シュトラスブルクなどの諸都市が地歩を固めてゆく。

富裕な商人はパトロンとして人文主義者たちを扶育し、かれらはその蔵書を公開することで知識が完全なものになるよう仕向けた（図書館の整備）。法学や医学の知識も普及して、提要や実務書がつくられるとともに、武勲詩、騎士道物語などの文学ジャンルも好まれるようになった。この頃の蔵書数をマルタンにしたがって一例をあげると、フランスのシトー修道院では1245冊、中部ドイツの修道院メルクでは794冊、バイエルンのテゲルンゼーには1794冊、一方でエアフルト大学には637冊、ニュルンベルクでは700冊以上の蔵書が確認されている。

もともと、書物はいぜんとして羊皮紙に美し

い書体で手書きされたものがよしとされ、書物の収集には読書のためというより鑑賞用のためという面もあった。とはいえすでに手写本は個別に作らせなくても書籍商に声を掛ければ購入できるものになっており、書籍商はといえば、いくつかの写本工房と販売契約を結び、他方、工房では増産のため内部での分業化と規格化に余念がなかった。

紙の普及

この状況を一気に加速させたのが、ほかならぬ紙の普及である。

紙は14世紀初頭から長いあいだイタリアの専売品であったが、1391年になるとドイツでも製紙水車が回り始めた。それでも自給自足にはほど遠く、その後しばらくは輸入を余儀なくされたが、それでも、羊皮紙にくらべて安価で丈夫な紙は輸送コストさえ軽減できれば（紙は重い）、書物の理想的材料であった。

エルザスのハーゲナウは大学もない小都市であったが、シュトラスブルクやパーゼルに近く、またニュルンベルクやフランクフルトのような大都市からもそう遠くない結節点に位置する一種の中継都市であった。さらに、隣接するロレーヌ、ブルゴーニュ地方で製造された紙を運び込むのに大きな輸送コストを要しなかったことも有利に働いたのであろう。1427年頃からディーボルト・ラウバーなる人物が、ここで写本工房の経営を開始した。

その写本はすべて紙でつくられていた。

ディーボルト・ラウバーの写本工房

ラウバーは、「dijpold laber schreyber, lert die kinder」という自筆署名を残しているもので、おそらく教師であったのだろう。また教会の書士ないし会計士（Stuhlschreiber）でもあり、旅人に馬をつないでおく厩舎を貸したりもしているから、専門の出版人ではなかった。

その製品は独特のタッチで描かれた、ラフで素朴なペン画によって挿画をほどこした紙装の手写本であり（図1）、これに最初に注目したカウチュ（Rudolf Kautzsch）は、現存する写本がどれもドイツ語（エルザス方言）のテキストをそなえていたことから、「民衆絵入り本」とみなしていた。そして、この工房にもっとも特徴的なのは、^{マニユファクチュア}工場制手工業による分業生産と、より広い市場を目指した在庫販売だとされている。じっさいにその手写本は、エルザス以外にもチューリヒ、コンスタンツ、ヴェルツブルク、ニュルンベルクなどに運ばれているのである（関連地図）。

出版案内

ラウバーは工房の「出版案内」を残している。ここには全部あわせて39点のタイトルが掲載されており、つぎのように書かれている。

「要しますに、いずれに書物をお求めでありましよう、大判型も小判型も、教会関係も世俗関係も、美しい挿画をほどこしたのも、すべてハーゲナウ城内の書士ディーボルト・ラウバーのもとにございます。さらに、『ローマ人の事績』なる大冊は、かつてローマで起きた事件を語り、神の歩まれた物語を語り、ローマの皇帝と教皇たちがいかなる奇蹟的なわざを行ったかを語るもので、挿画をほどこしております。つぎに『キリスト伝』。つぎに『二十四長老』、挿画入り。さらに『韻文聖書』。つぎに『騎士ウィガロイス』、挿画入り。つぎに『ヴォルフ・ディートリヒ』、挿画入り、つぎに『全受難記』、『聖人伝』冬の巻・夏の巻、二部の大冊。つぎに『通年曆 使徒書簡・聖福音集』、註釈と聖者・聖女つき。つぎに『ヴィルヘルム・フォン・オルレンス』、挿画入り・・・（後略）」（*London, British Library: Ms. Add. 28752*）

ラウバー自身の手で書かれたと思われるこの案内には、その他にも、「トリスタン」、「パルチヴァル」(図2)、「トロヤ戦争」、「シュヴァーベンシュピーゲル」、「チェス指南書」などの中世の人気タイトルが散見される。これらはいわゆる売れ筋商品であり、工房が在庫生産による販売を行っていた証拠とされる。

書籍制作の産業化？

こうしてラウバー工房は書籍制作の産業化のプロトタイプ(書物の商品化の嚆矢)とみなされた。制作過程は極力合理化され、量と速度に挑戦して、考えうる限りの値下げと広い市場を目指したのだという。しかしここでは結論を急がずに、もう少し手写本の「造り」を仔細に見てみたい。

手写本は、全紙の紙葉を折り伸ばしてノドのところで接着する二重葉(Doppelblatt)という手法により、しばしば通常の写本の2倍の判型(40.5×27.6 cm)に達している。そこにページ大の巨大な彩色挿画がレイアウトされる。一般的な細密画^{ミニチュール}では、銀尖筆により下書きをしたうえに、膠塊粘土(黄土)で下塗りをして金箔を貼り込み、あくきがいの分泌物やインディゴ、ラピスラズリなどの高価な絵の具によって彩色されるのにたいして、たしかにラウバー写本は、ディテールを簡略化したペン画で、下書きもなく、矢車菊やコケモモなどの安価な絵の具をもちいた大雑把で面的な彩色である。

しかし、サウルマ女史(L. E. Saurma-Jeltsch)の説明によれば、その写本はいずれも高度に規格化され、一目見てラウバー写本であることが判別できるその「ブランド性」に特徴があり、そこに人気の秘密があったのだという。なるほど、現存する手写本における挿画の総数は、じつに6千点にもおよんでいる。そもそも、迅速で安価な制作に関心があったとすれば、廉価版の書物のように、なぜ挿画そのもの

をやめてしまわなかったのだろうか。なぜ大判の書冊をつくり、巨大な挿画を描き込む必要があったのだろうか。

顧客グループ

フェヒター(Werner Fechter)は、ラウバー写本の購入者・所有者の大多数が貴族や都市貴族^{パトリツィアート}であったことを証明した。その一人、騎士ウルリヒ・フォン・ラッペルトシュタインは写本に軍馬一頭分の値段を支払っているという。しかしそれでも羊皮紙の装飾写本よりは相当に安価であった。大判の書冊、手描きの彩色挿画、そしてテキストの書体が鷹揚なバタルド体(Bastarda, 折衷体)(図3)であったことも貴族の気に入る要素であったのだろう。写本は、その点を押さえながらコストダウンされたのである。日常語で書かれた安価な書物は利用しやすい。「鑑賞する」ためや財産として「所有する」ためではなく、まさに貴族が「読む」ために制作されたのが、このラウバー手写本であったといえる。

写本制作システム

さて、「出版案内」にみられるような幅広いレパートリーを提供するためには、注文に応じて確実に納品できるよう、ひと揃いのテキストと挿画の「版下」を備え、複数の筆写係と挿画係による、ある程度一貫した制作組織が必要であっただろう。じっさいに工房では5名の筆写係と16名の挿画係の存在が確認されており、とくに筆写係は名前も判明している。書写の仕事は賃労働であり、そのつど職人を雇い入れているが(だから名前がわかる)、挿画の仕事は共同作業を行うグループから構成されていた。現存する手写本の年代と担当係の分析から、おもな挿画係の制作活動期を概念図にまとめてみたので参照してほしい(図4)。横軸は左から右に向かって1420年代から60年代に推移し、挿画

係Aから挿画係Oまで、13名(あるいはチーム)の活動を、制作点数が多い場合に、より太い線で表わしている。

ここから判明するのは、すべての挿画係が同時期に活動していたわけではなく、当初は挿画係CとEの2名による比較的小規模な制作体制であったこと、そしてそれにたいして、最盛期の50年代には10名(チーム)以上の挿画係を擁していたということである。もっとも、挿画係Oなどは1点しか制作していないため、いわば臨時雇用の職人であったかもしれない。ちなみに、挿画係Aはラウバー自身であったとみなされている。

また、概念図の縦軸には絵柄のタッチの粗さ(roh)と緻密さ(sorgfältig)を区別する基準を導入した。これにより、中期以降からタッチがより緻密なものに変化していることがわかる。わたしはこれを顧客層の嗜好の変化に連動した現象だと考えているが、この点については稿を改めねばならない。

いずれにせよ、複数の手写本を比較すると、そこには一定のヴァリエーションがあるとはいえ、挿画の図像の統一性、言い換えれば^{ステレオタイプ}紋切り型のイメージを読み取ることができる。これは制作にあたって図像の基本モデル=手本が存在したことを示唆している。そしてその簡潔な線による輪郭線やハッチング技法は、^{タブロー}板絵よりもむしろ木版画やステンドグラス、タペストリにみられる様式の影響を感じさせるのである。

その他にも、挿画はあきらかにラウバー工房のものでありながら、テキストの筆写は別の工房で行われたと思われる手写本がある。方言がことなるのである。またこれとは反対に、テキストは、(挿画のために決められた空間をあけて)工房で筆写され、その後挿画が、描き込まれたのではなく貼り込まれた写本も見出されている。おそらく写本は折り丁のまま近隣の複

数の専門工房のあいだでやり取りされ、あらかじめ決定されたプランにしたがって、最終的に一つの書冊に統合されたのである。

むすびにかえて

工房におけるラウバーの役割が、筆写や挿画そのものにおよんでいたことからわかるように、かれは経営者というよりは監督であり、挿画プランの決定や全体のコーディネートにかかわっていたと思われる。その工房には、立ち上げ当初から苦楽をともにした挿画工がおり、ラウバー手写本の雰囲気全体のトーンをつくりあげていた。かれらは長期にわたる「ブランド」維持にかかわった。これに、仕事量に応じて複数のチームが合流し、場合によっては臨時雇用、アウトソーシングなどで制作を維持・拡大したのである。したがって職人がすべて同じ屋根の下にいたわけではなく、その意味で工場制手工業というのは当たらない。

また、その挿画は美しさというよりも人物の動き、すなわち言葉としてのジェスチャーや儀礼的行為を表現したもので、たんなる飾りではなくテキストと一体化したものであった。これは書物の「読み」の変化を示すものであろう。そしてやはりテキストそのものも、ラテン語から解放され、日常語を採用することで、書物化する^{タイトル}題材を飛躍的に押し広げることができた。多くの顧客を獲得することで、制作システムは合理化され、より安価な手写本を提供するに至るのである。コストダウンしたことで顧客層を拡大した、という逆の流れではなかったことに注意せねばならない。

これにたいして、活版印刷の^{インキュナブラ}揺籃期本のタイトルの8割近くがラテン語に戻ってしまっていることは、はなはだ興味深い。ドイツ語テキストによるインキュナブラは、わずか1割にすぎないのである。そこには - 多くの革新にもかかわらず - 手写本のもつ伝統主義が影響を及

ぼしているのだろう。

このように15世紀の活版印刷の時代にも手写本は、あらゆる文学ジャンル、美術ジャンルを取り込みながら、「読む」ための構造をもった書物をつくりだし、確実に読者層を拡げていった。この時代の手写本を検討することで、われ

われは現代につながる書物の成り立ちを理解することが可能となるのである。

なお、ラウバー写本の閲覧にさいしてハイデルベルク大学図書館のカーリン・ツィマーマン女史 (Karin Zimmermann) には大変お世話になった。末尾ではあるが記して感謝申し上げたい。

(おがわ・ともゆき)



関連地図 ハーゲナウとその周辺都市



図1 「フローレとブランシェフルール」(Cod. Pal. germ. 362)の挿画(1440年頃)。挿画係Aグループ



図2 「パルチヴァル」(部分)(Cod. Pal. germ. 339)。建物にハッチング技法をもちいている

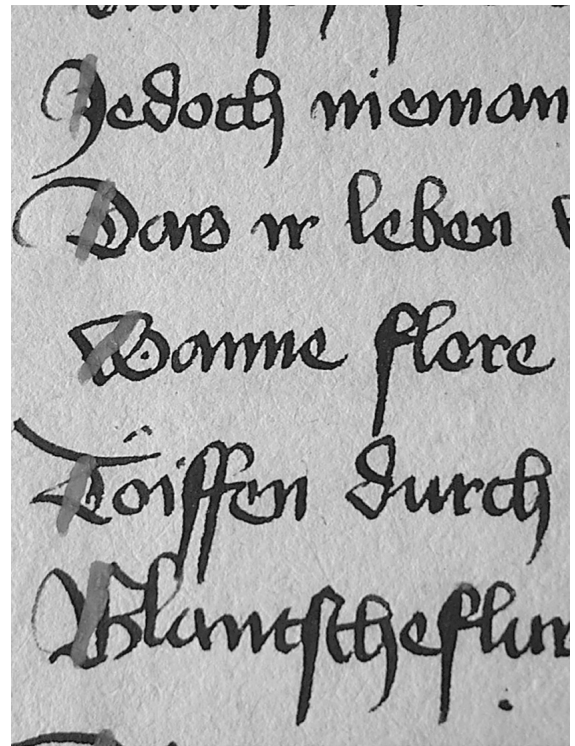


図3 バタルド書体。ゴシック・カーシヴの一種。北フランスで生まれ、15世紀末にフランドルの豪華写本によくもちいられた。イングランドでは初期の活字にも採用されている

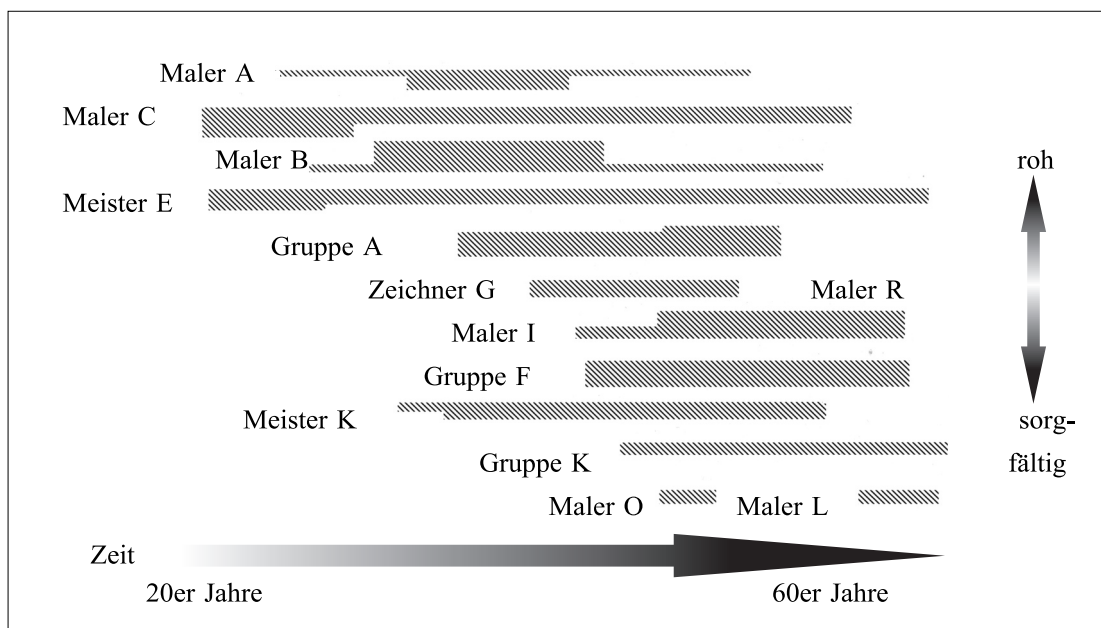


図4 おもな挿画係の制作活動期(概念図)

Literatur:

Fasbender, Christoph: *hübsch gemolt - schlecht geschrieben? Kleine Apologie der Lauber-Handschriften*, in: Zeitschrift für deutsches Altertum und deutsche Literatur 131 (2002), S. 66-78.

Fechter, Werner: *Der Kundenkreis des Diebold Lauber*, in: Zentralblatt für Bibliothekswesen 55 (1938), S. 121-146 und S. 650-653.

Kautzsch, Rudolf: *Diebold Lauber und seine Werkstatt in Hagenau*, in: Centralblatt für Bibliothekswesen 12 (1895), S. 1-32, 57-113.

- - : *Diebold Lauber und seine Werkstatt. Eine Nachlese*, in: Archiv für Buchgewerbe und Gebrauchsgraphik 63 (1926), S. 42-45.

Kurth, Betty: *Handschriften aus der Werkstatt des Diebold Lauber in Würzburg, Frankfurt und Wien*, in: Jahrbuch des kunsthistorischen Institutes der k.k. Zentralkommission für Denkmalpflege 8 (1914), Beiblatt, S. 5-18.

Ott, Norbert H.: *Die Handschriften-Tradition im 15. Jahrhundert*, in: Tiemann, Barbara (Hrsg.): *Die Buchkultur im 15. und 16. Jahrhundert* (Veröffentlichung der Maximilian-Gesellschaft. Jahressgabe der Maximilian-Gesellschaft) 1. Halbband, Hamburg 1995.

Saurma-Jeltsch, Lieselotte E: *Auftragsfertigung und Vorratsarbeit. Kriterien zu ihrer Unterscheidung am Beispiel der Werkstatt Diebold Laubers*, in: *Unsere Kunstdenkmäler* 36 (1985), Heft 3, S. 302-309.

- - : *Die Kommerzialisierung einer spätmittelalterlichen Kunstproduktion. Zum Wandel von Konzeption und Herstellungsweise illustrierter Handschriften bei Diebold Lauber und seinem Umkreis*, Berlin, Habil.-Schr. (mach.schriftl.), 1991.

- - : *Spatformen mittelalterlicher Buchherstellung. Bilderhandschriften aus der Werkstatt Diebold Laubers in Hagenau*, Wiesbaden 2001.

Schmitt, Anneliese: *Tradition und Innovation von Literaturgattungen und Buchformen in der Frühdruckzeit*, in: Tiemann, Barbara (Hrsg.): *Die Buchkultur im 15. und 16. Jahrhundert* (Veröffentlichung der Maximilian-Gesellschaft. Jahressgabe der Maximilian-Gesellschaft) 2. Halbband, Hamburg 1995.

Traband, Gérard: *Diebold loubet scriber zu hagenowe*, in: *Etudes Haguenviennes* N.S. 8 (1982), S. 51-92.

Vernissage. Die Zeitschrift zur Ausstellung: Die Universitätsbibliothek Heidelberg. Kostbarkeiten gesammelter Geschichte, 5/00 8. Jahrgang 63, 2000.

Wegener, Hans: *Die deutschen Volkshandschriften des späten Mittelalter*, in: *Mittelalterliche Handschriften*. Festgabe zum 60. Geburtstag für Hans Degering, Leipzig, 1926, S. 316-324.

E.L. アイゼンステイン (別宮貞徳監訳) 『印刷革命』 みすず書房, 1987年

ウンベルト・エーコ (河島英昭訳) 『薔薇の名前』 東京創元社, 1990年

ロジェ・シャルチエ / グリエルモ・カヴァッロ編 (田村毅 他共訳) 『読むことの歴史』 大修館書店, 2000年

條麻美子 「物語る人々 - 中世ヨーロッパの文芸受容について」 『テキスト 危機の言説』 (表象のディスクール 2) 東京大学出版会, 2000年, 259 - 275頁
高宮利行 『グーテンベルクの謎』 岩波書店, 1998年

- - 「写本から印刷へ - - グーテンベルク聖書を考える (2) 中世の写本生産」 『図書』 578, 岩波書店, 1997年7月, 44 - 49頁

戸叶勝也 『ドイツ出版の社会史』 三修社, 1992年
宮下志朗 『書物史のために』 晶文社, 2002年

リュシアン・フェーヴル / アンリ＝ジャン・マルタン (関根素子・長谷川輝雄 他訳) 『書物の出現』 筑摩書房, 1985年

福本直之 「西洋中世古写本学提要」 『創価大学総合文化部 一般教育部論集』 第24号, 2000年2月, 1 - 30頁

本稿は, 平成18年度科学研究費補助金 (若手研究 (B)) の成果の一部である。

工学教育・学習を支援する電子ブックの導入

工学分館管理係長 米 澤 誠

はじめに

電子ジャーナルに代表される学術情報の急速な電子化・ウェブ化は、研究のみならず教育・学習環境も変えつつあります。欧米では、図書資料の電子化も急激に進展し、教育の場での活用について議論されるようになってきました。

工学分館では、国際的な研究力と競争力をもった若手研究者の育成を、英語の電子的資料の提供というかたちで支援するため、2007年3月にウェブで利用できる電子ブックサービス Net Library を導入しました。本稿では、工学教育・学習を支援するという目的にそった、電子ブックの導入のねらいについて説明します。(電子ブックサイト：<http://www.library.tohoku.ac.jp/ebook/>)

1. シラバスからの目標設定

工学分館では、教員の行う工学教育、学生の自主的な学習を支援するために、工学部シラバスに掲載された教科書・参考図書は全て収集し、工学部のシラバスから所蔵検索を可能にしています。(<http://dbs.library.tohoku.ac.jp/syllabus/>)

シラバスで工学部の教育内容を確認すると、工学分野の基礎知識を習得するために、数学・物理学・化学などにかなり重点をおいた教育を実施していることが分かります。それらの基礎知識をベースとして、各分野の専門教育が行われるのです。この基礎教育は、おおむね日本語のテキストもしくは教材で行われています。

そして、4年生あたりから英語の論文を読解するための教育が行われます。さらに大学院になると、英語で発表する訓練も行うようになります。

基礎教育から専門教育、そして英語での専門教育と展開するこのような教育課程では、英語

による基本的テキストを随時参照できるようにしておく必要があります。特に、基礎的学問分野での英語表現方法や語彙、論述方式などを学ぶには、基本的・入門的な英語図書が有用であると考えたのです。

2. 基本図書の選定

「工学の基礎となる共通分野(数学・物理学・化学)の基本図書を重点的に選定する」という方針のもと、約1万8千タイトルの理工系図書からの選定を開始しました。選定作業は、次のようなプロセスで実施しました。

大分類(数学・物理学など)で仕分ける
基本・入門図書の価格帯の資料を抽出する

細分類(特定主題)でソートする

書誌事項から基本・入門図書を選定する

ここまでの選定候補リストを使い、学部内の図書担当教員が選定作業を行う

選定候補リストは、共通学問(数学・物理学・化学)毎にそれぞれ約100タイトル、工学で約400タイトルからなるものでした。最終的にこの選定候補リストの中から、約200タイトルを選定し導入することとしました。

さいごに

今後は、導入した電子ブックの利用状況を分析し、利用の活性化やタイトル数の充実をしていきたいと考えています。またそのためには、イコールパートナー精神の下、工学教育を行っている教員の方々のご意見を聞きながら、サービスの充実を図っていく必要があると思います。

今回の電子ブックの導入は、平成18年度工学研究科長戦略的経費によるものです。

(よねざわ・まこと)

平成18年度東北地区大学図書館課題検討ゼミナール開催報告

総務課 情報企画係

平成19年2月21日(水)に、「発信する図書館の新局面」をテーマに、東北地区大学図書館協議会加盟館職員を対象とした標記ゼミナールを開催しました。この催しは、大学図書館が共通して抱える諸課題について、テーマに関する情報を得た上で、それぞれの立場でどのように取り組むかを考えることを目的とし、今回初めて開催されたものです。

県内外の国公立大学図書館から44名という多くの参加者があり、4人の講師による下記の講演が行われました。

- ・「エルゼビア電子ジャーナルの現状と取り組み」
エルゼビア・ジャパン株式会社 高橋昭治氏
- ・「リンクリゾルバと図書館システムについて」
北海道大学附属図書館 堀越 邦恵氏
- ・「図書館と著作権：特に DDS との関連について」
山形大学学術情報部 友光 健二氏
- ・「図書館における資産活用と外部資金獲得について」
東北大学附属図書館 佐藤 初美氏

高橋氏からは、同分野での他出版社との論文獲得競争に生き残るために、著者のニーズを理解し、投稿システム等を工夫しているといったエルゼビア社の取り組みについてお話がありました。また、冊子体から電子ジャーナルへの移行に伴う、非購読タイトルへのアクセス拡大といった状況の変化についても触れられました。

堀越氏からは、文献情報データベースから、図書館が提供する電子ジャーナルや冊子体の論文へスムーズなナビゲーションを提供するシステムである、リンクリゾルバの解説がありました。

さらに、北海道大学附属図書館も参加している取り組みとして、各機関の研究教育成果を蓄積した機関リポジトリへリンクリゾルバ経由でのナビゲートを目指す Airway プロジェクトを紹介して頂きました。

友光氏には図書館と著作権との関わりについて、基本的なところからまとまったお話をし

て頂きました。国立大学図書館協会東北地区協会における、複合複写機での文献送信の取組みも紹介されました。

佐藤氏からは、東北大学附属図書館における、所蔵資料を活用した商品販売の活動紹介がありました。利益を求めめるためではなく、必要経費を回収して、継続的な社会貢献活動を行うための手段として捉えているというお話でした。



会場の様子

大学図書館の情報発信というテーマには、これまで提供してきた資料を、さらに利用しやすい形で利用者に向け発信する、また、これまで埋もれていた資料を、社会貢献や大学アピールといった新たな目的で発信するという2つの視点があると思います。

今回は、30分程度の短い講演を4件行う形式でしたが、「短時間で色々な種類の講演だったので、最後まで飽きずに聞けました。」という参加者の感想にもあるように、2つの視点それぞれについて、多様なヒントを得られる密度の濃い内容だったのではないかと思います。

また、大学図書館における情報発信の促進には、図書館だけでなく、出版社や代理店等も含めた、情報流通に関わる関係者による広い視野での議論が必要と思います。今回はエルゼビア社の講演がありましたが、本ゼミナールが、今後そのような場を増やすきっかけとなることも期待しています。

『東北大学生のための情報探索の基礎知識』 人文社会科学編2007，基本編2007を刊行

総務課 情報企画係

(1) 『人文社会科学編』の刊行

『東北大学生のための情報探索の基礎知識・人文社会科学編』は、同『基本編』で基礎的な情報探索技術を習得した、東北大学の文系の学生を対象に、より専門的な情報収集の方法について手ほどきしたものです。

人文社会科学系で、ある程度共通して使える専門的な資料や、情報へアクセスするための知識をまとめた、これまでになかったタイプの手引きになっており、下記のような特色があります。

- ・実際の研究の流れに沿い、先行研究の探索法と一次資料（本書では「原資料」と表現しました。）へのアクセス方法解説を大きな2つの柱とした。
- ・全般・文学・教育学・法学・経済学の5分野に区分し、それぞれの代表的な先行研究検索ツールや一次資料について解説した。
- ・特に一次資料についての解説に重点を置いた。また、重要な一次資料が身近にあることを知ってもらうため図書館のコレクションについても解説した。
- ・デジタルのみではなくアナログな手段も紹介し、双方の必要性を理解してもらうようにした。

本書の編集にあたっては、事前に本学の人文社会科学系の教員および大学院生の方々にアンケートを実施し、利用しているツールの実態や本書のあり方に対する要望を把握することに努めました。挙げられた各分野お勧めのツールを、最後の章で紹介しています。

図書館カウンターで配布していますので、入手希望の方はお申し出下さい。本書が活用され、素晴らしい研究成果が生まれることを願っています。



『人文社会科学編』

(2) 『基本編2007』の刊行

これまで2004、2006年版を刊行してきましたが、新たに利用可能となった情報検索ツールの紹介や、表現を工夫してさらにわかりやすくなるよう努めるなど、今年も見直しを行いました。頻度の高いメンテナンスにより、附属図書館のサービスを活用するための最新情報が満載されています。

新入生全員および希望者に無料配布しており、レポートや論文作成のための効果的な情報検索の方法を身につけることができるようになっています。図書館主催の各種講習会や、平成16年度から開講している全学授業「大学生のための情報検索術」など、本書の内容に基づいた実習が行える場も設定しています。こちらへのご参加もお待ちしています。

図書館講習会の新機軸 - 工学分館講習会，2年間の試み -

工学分館情報教育支援ワーキンググループ

工学分館では、平成17年度から「理工系学生のための情報検索講習会」を開催しています。この2年間に出席者数を地道に増やし、反響に応じてプログラムも拡充してきました。その軌跡を振り返ってみたいと思います。

1．講習会開催の経緯

これまで工学分館では、定期的な講習会を行っておらず、工学部の学生は本館での講習会に出席するしかない状況が長く続いていました。この状況の改善を目指し、平成17年度6月から工学分館を会場とした「理工系学生のための講習会」を開始しました。

当初は参加者層も時間帯も手探りの状態にあったので、開始時間を変えて学生が参加しやすい時間帯を探り、内容についてもアンケートを繰り返して、参加者の満足が得られる講習会を目指しました。

こうして一年の積み重ねの上で出した平成18年度の内容は、「上手なレポートの作り方」16：20 - 17：00（40分） 「上手な文献の探し方」17：00 - 17：40（40分）の2コマを講習するものとなりました。

年間の開催スケジュールも夏期・冬期・春期休業を除く毎月2 - 5日間で講習会を行うことにし、月別参加者の増減から、参加者の動向を把握しようと努めました。

また運営体制は、情報教育支援ワーキンググループに所属している職員2名と有志の者数名で開始したものの、有志で開催することの難しさが出てきたため、「工学分館情報教育支援ワーキンググループ」を設置して、安定的な講習会運営体制をつくりあげ、現在に至っています。

また平成18年11月からは、実習用ノートパソコンを導入し、利用者の理解が一層深まる講習

会に変貌を遂げました。

2．参加者アンケートなどの結果

ここでは参加者数やアンケートの集計のデータを紹介します。

，2006年度参加者

月	4月	5月	6月	10月	11月	1月	合計
人数	35	13	11	9	26	6	100

，参加者学年内訳

学年	1年	2年	3年	4年	M1	他	合計
人数	14	19	36	11	14	6	100

，アンケート：この講習会の有益な点（上位5位まで）

- 1位：雑誌論文の探し方（57名）
- 2位：（レポートの）序論の書き方（45名）
- 3位：（レポートの）文章の改善例（43名）
- 4位：図書の見つけ方（37名）
- 5位：レポート作成の手順（35名）

，アンケート：他に講習して欲しい内容（上位2位）

- 1位：卒業論文の書き方（40名）
- 2位：文章の書き方（32名）

3．レポート作成を入り口とした講習会の開催

さて以上のアンケート結果から、参加者はレポート論文の講習会に対して非常に興味関心があることがわかります。この講習会の特徴は、青葉山を中心とした理工系地区で初の本格的な図書館講習会であるだけでなく、講習の構成

を2部構成とし、第1部を「レポート作成」についての講習にした所にあります。「レポート作成」を講習することは、当附属図書館が運営する全学教育科目「大学生のための情報探索術」で実施済みの事ですが、附属図書館管内で開催する講習会では初の試みです。

利用者がレポート・論文を作成する際に、「情報探索」「レポート・論文の作成」のプロセスを経るものですが、図書館での従来の講習会は、このプロセスの入り口である「情報探索」を専門に取り扱ってきました。しかし、その内容では「主体的な情報探索」の重要性に気づいた学生は参加するものの、それ以外の学生に見向きもされず、結果、職員の労苦が多い割には参加者が伸びない講習会の乱発という状況が続いていました。

そのような講習会を工学分館で拡大再生産しても意味がないと考え、この利用者の「情報探索」「レポート・論文の作成」という情報利用行動プロセスを逆転し、「レポート・論文の作成」の方法を入りに、利用者が自覚的に学習を志す「情報探索」の講習会(米澤誠「レポート作成を起点とした情報リテラシー教育の試み」『医学図書館』2007掲載予定)というものを目指しました。

具体的には、利用者に対して実利的・即効的である「レポート・論文の作成」をまず先頭に置くことで学生の関心を惹き、その中で引用や参考文献の重要性を理解させた上で、「では、どうすればこのような文献類を入手できるのか?」という問題提起をします。それにより文献の調達、つまり「情報探索」が学習にとって重要であることを理解させつつ、第2部「図書・雑誌の探し方」に対してのモチベーションを上げる事になるのです。

以上の考えで始めた講習会は、のアンケート結果に出ているように概ね好評であり、「卒業論文の書き方」を講習内容に望むような、より高いレベルの研究成果作成講習会を求めくらしいになっています。この好結果を受けて、来

年度以降も継続してこの形式の講習会を開催していこうと考えています。

4. 工学分館全体で取り組む利用者教育

さて「レポート・論文作成」を看板にし、春期・夏期・冬期休業を除いたほぼ毎月当講習会を開始した訳ですが、講習会の運営体制が、最初に説明した通り、情報教育支援ワーキンググループのメンバー2人と数人の有志をもって開催している体制であったので、所属する系の職掌分担の問題や、正規の職務との兼ね合いの問題があり、いつまでもこの不安定な体制で開催する訳にはいかなくなってきました。

また、平成18年度にノートパソコンに無線LANを装備し、講習会の実習用端末として活用できる事になったため(従来は実習無しの一方向講習会)従来は講師一人で切り盛りできた講習会が、参加者の実習を側面から支援する役割の補助者が必要となり、従来の有志だけの体制では講習会運営の人手が足らなくなってきました。

それらの問題を工学分館全体で対応するために平成18年11月より「工学分館情報教育支援ワーキンググループ」設置しました。これは工学分館の構成員を系の別なく集め(専門員、管理係長、整理運用係長は全員参加)、講習会などの利用者教育業務を運営する母体となるように設置しました。これにより整理運用係員と、管理係が協力して講習会を運営できるようになりました。またこのワーキングでは講習会運営と同じように分担が難しいオリエンテーションや、工学分館作成の利用者サービス資料の編集なども扱うことになり、分館の利用者サービス業務に多角的に対応できるような組織を維持することを目指しています。利用者部門は、目先のサービス業務に毎日追われ、その中で講習会等のイベント業務を辛苦に耐えて開催するか、一切切り捨てて開催しないという選択肢しか無く、どこの図書館・分館でもデスクワークを中心とした部門の応援と協力はなかなか実現でき

ないのが現状だと思われますが、このような分館の総力を挙げた利用者教育の試みは、今後の人手不足の時代に有効な手であると思います。

5. 利用者教育から職員講習会へ

さて学生向けの講習会は一定の評価を得ることができたので、その他に講習が必要な層があるかワーキングで検討した結果、工学部で研究室業務に携わる秘書層をターゲットに講習会を開催する事を企画しました。これは秘書の方が、図書館に入館したことすらないという方が多いという情報から、この層向けの講習会を行うことで、秘書の皆さんの仕事の幅が広がるのではないかと考えて企画したものです。

そこで試行の講習会を学生が休業中で研究室業務が比較的余裕のある3月に開催しました。(3/6, 3/13, 1回を1時間)内容は、蔵書検索システムの紹介と工学分館の利用案内(含館内ツアー) 理工系雑誌記事索引データベースの紹介と実習を行いました。

この講習会には両日とも約10名の参加者があり、アンケートからも当講習会が求められていたものと感じられる記述が多くありました。

6. 今後の課題と展望

以上の様に、この2年間で工学分館の講習会は、

「レポート作成」を入り口とした魅力ある講習会作り

ワーキンググループ設置による、全館体制での利用者教育業務分担

「秘書のための図書館講習会」の開催による研究室職員への情報リテラシー支援

を達成しました。今後も講習会内容の充実を目指し、理系部局の講習会拠点としての活動を尚一層拡充して行く方針です。

最後に、ワーキンググループのメンバーをはじめとした工学分館職員の皆様にこの場を借りてお礼申し上げたいと思います。

～こらむ～ つ・ぶ・や・き (4)

カウンターでの拙い経験からの繰り言は、カナダからの旅人を紹介して今回にて終了。

ある日ある時、本館の正面玄関から外国人男性が、脇目もふらずにカウンターに近づいてきた。巨大なスーツケースを抱えているので、学会か何かへの出席者が図書館見学にみえたのかと思いきや、開口一番、彼は「東北大学に就職したい、どこに行ったらよいか」と宣うた。聞けば、仙台空港に到着しまっすぐにここまでやって来たとのこと。見ず知らずの、しかも突然舞い込んだ旅人を紹介できるアテなどあるわけがない。せっかく来てくれた方にはなにか情報を提供しなければ、と思い直しひらめいたのは、「電話帳は有効な参考ツール!」。分厚い電話帳で英会話学校の番号をいくつか教えると、彼は笑顔で立ち去っていった。

その時、伝統あるホテルの支配人のいつかラジオで語っていた言葉がおもいだされしみじみと後ろ姿を見送った。

「訪れる者に安らぎを、去りゆく者に幸せを」

ドイツ、ローテンブルクの門に刻まれているというこの言葉こそ、サービスの神髄ではないだろうか。

(徒然子) 文責：工分及川

連載「江戸の遊び - けっこう楽しいエコレジャー」を巡る話題から(2)

よむ楽しみ

情報管理課受入係 木戸 浦 豊 和

はじめに - 「読む」ことと「詠む」こと

平成18年度企画展「江戸の遊び - けっこう楽しいエコレジャー」を巡る話題の第2回として、「よむ楽しみ」を紹介します。

江戸時代は「よむ」ことの楽しみが一般化した時代でした。「よむ」ことの楽しみとは、1つには本を「読む」楽しみであり、もう1つは俳諧や狂歌、川柳などを「詠む」楽しみです。

本稿では、展示会で紹介した資料のいくつかを取り上げ、「読むこと/詠むこと」の楽しみを伝えることができたらと思います。

1. 江戸のジャンル小説

江戸時代になると木版画の技術を利用した整版印刷によって書物の刊行部数が増大し、出版が商業として確立しました。本は人々にとってより身近な存在となり、「読む」ことの楽しみが庶民の間にも広まりました。出版は文化を支える基礎となり、人々は書物を通じて様々な知識や流行を享受していきました。

特に18世紀半ば頃から戯作と呼ばれる小説が

趣味的・娯楽的読み物として流行していきます。遊郭での遊びを描いた「洒落本」やユーモア小説としての「滑稽本」、主に恋愛を扱った「人情本」、文学性の強い「読本」や子どもや大人向けの絵本としての「草双紙」、さらには草双紙から派生した「黄表紙」や「合巻」など、様々な小説ジャンルが誕生しました。滑稽本の式亭三馬『浮世風呂』(1820)や十返舎一九『東海道中膝栗毛』(1802 - 1822)、合巻の柳亭種彦『修紫田舎源氏』(1829 - 1842)、読本の滝沢馬琴『南総里見八犬伝』(1814 - 1842)などは、現在でも良く知られている名作・傑作です。

江戸時代の小説は、出版者(版元)が企画を作り、作者や題材、挿し絵画家などを決定していたと言います。現代の小説でも、推理小説やSF小説、ファンタジーやホラー小説、時代小説や恋愛小説など様々なジャンルに細分化され、特定のジャンルを偏愛する読者が存在しますが、特定の読者層を対象にしたマーケット戦略は、すでに江戸時代からはじまっていたと言えます。



十返舎一九『東海道中膝栗毛』

弥次さん、喜多さんの珍・道中記。庶民の間に一大旅行ブームを巻き起こすほどの人気ぶりだった。



柳亭種彦『修紫田舎源氏』

2冊で1組の絵となる。作中人物が大鏡に姿を写し、身仕度をしている。美しい表紙も魅力。

2. 「偉大なるエンタテインメント」小説

- 『南総里見八犬伝』

江戸時代を代表する小説『南総里見八犬伝』は、滝沢馬琴が30年にも渡り書き継いで完成させた畢生の大作です。

安房の里見義実の愛娘・伏姫と飼犬・八房の宿業からもたらされた「仁義礼智忠信孝悌」の8つの水晶玉は、牡丹形の痣を持つ8人の犬士たちを邂逅させ、彼らを里見王国の創建へと導いて行きます。中国の長編小説『水滸伝』に範を取る壮大な物語展開と緻密な構成、場面に応じた魅力的な描写と、柳川重信らの精緻な挿し絵とも相俟って、読者を浪漫的な伝奇の世界へと誘います。

『八犬伝』は、主に貸本屋を通じて全国津々浦々で競って読まれました。その人気は広く老若男女にまで及び、柳亭仙果・歌川豊国等画『雪梅芳譚 犬の草紙』(1848 - 1852)をはじめとするダイジェスト版や、数々の影響作・模倣作、さらには愛読者が『八犬伝』がはらむ様々な謎について直接、馬琴と応接した一種の「謎解き本」(榎亭琴魚・曲亭馬琴『犬夷評判記』1818)の出版、歌舞伎や錦絵にも取り上げられるなど、その人気は絶大なものでした。

『南総里見八犬伝』の大きな影響力は明治20年頃まで続きました。『八犬伝』は、北村透谷や森鷗外、幸田露伴や正岡子規など明治時代の

初めから半ばにかけて青春を過ごした多くの若者たちも愛読した小説だったのです。

しかし、よく知られているように、坪内逍遙が『小説神髓』(晩青堂, 1885 - 1889)の中で『八犬伝』の登場人物たちを「仁義八行の化物」と貶めて以後、『八犬伝』の評価は没落して行きます。西洋の小説に学んだ逍遙は、馬琴の小説を観念的でリアリティに乏しいと強く批判したのです。馬琴を否定した逍遙は、しかし実は、幼い頃から戯作に親しんでもいました。逍遙は小説の近代化のために江戸時代の小説を否定せざるを得ない立場にあったのです。

逍遙による馬琴否定の言説は、自然主義小説の興隆とともに強い影響力を持ちます。例えば自然主義を代表する小説家・正宗白鳥が、夏目漱石の朝日新聞社入社第一作『虞美人草』(朝日新聞, 1907.5 - 1907.10)を、「近代化した馬琴」(「夏目漱石論」『中央公論』1928.6)と真っ向から否定したことは有名です。

『南総里見八犬伝』の評価は、1970年代から80年代頃にかけて復権しました。小説家・京極夏彦氏が「現代のエンタテインメントのひな型」(『妖怪大談義 対談集』角川書店, 2005)と絶賛するように、『南総里見八犬伝』の想像力は、現代の映画や漫画、小説、テレビゲームなどの豊かな源泉として繰り返し参照されています。



鯉に乗る里見義実と金碗八郎孝吉
鯉は「里」見の「魚」を表す。



伏姫と愛犬・八房と金(鞠)碗大輔孝徳
若き画家・柳川重信の挿し絵にも注目。



八犬士と大和尚
挿絵の図案についても、馬琴が細かく指定していたという。



自害する伏姫
伏姫の身体から水晶の数珠が虚空へと昇り、流星のように八方へ飛散する。『八犬伝』有数の名場面。

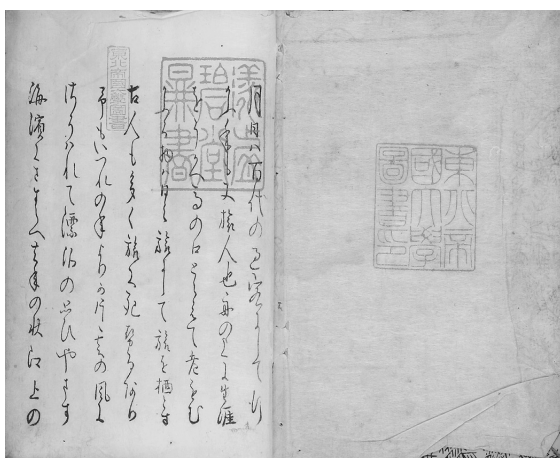
3. 短詩型文学の流行 - 俳諧・狂歌・川柳・回文
江戸時代には短詩型文学の世界にも変化が起きました。従来の貴族や知識階層を中心とする和歌や連句に変わり、庶民を中心に俳諧や川柳、狂歌や回文などを「詠む」楽しみが流行します。

連歌は、室町時代後期に俳諧連歌から派生し、江戸時代初期に松永貞徳によって流行の基礎が築かれました。そして、よく知られているように、松尾芭蕉『奥の細道』（1702）などによって俳諧は文学として大成します。一方、川柳は、より遊技的な要素を持つ雑体の俳諧として誕生しました。季語や切れ字も必要なく、江戸庶民

の風俗や世相、生活感情を詠み込んだ短詩として流行しました。

狂歌は、和歌の形式に滑稽味を盛り込んだ歌として発展しました。天明期（1781 - 1788）に最も栄え、多くの狂歌本も刊行されました。その中でも特に著名なものが、宿屋飯盛撰・北尾政演画『吾妻曲狂歌文庫』（1786）です。これは、江戸時代を代表する出版者であり、かつ稀代の芸術プロデューサーでもあった蔦屋重三郎によって刊行されました。代表的な狂歌師を歌仙に見立て、それぞれの作品を添えた豪華なこの絵本は、狂歌ファンを熱狂させました。

回文とは、上から読んでも下から読んでも同



松尾芭蕉『奥の細道』
本書は寛政元年（1789）に刊行された再版。漱石文庫所蔵。



宿屋飯盛撰・北尾政演画『吾妻曲狂歌文庫』
左の人物は宿屋飯盛。国学者・石川雅望としても有名。右は鹿都部真顔。

じ読みになる、機知と洒落に富んだ言葉遊びです。仙台出身の仙代庵^{せんたいあん}は、回文師として著名です。例えば、仙代庵が作並について詠んだ回文に、「みな草の名は百としれ葉りなりすくれしとくは花のさくなみ」というものがあります。

おわりに - よむことの快樂

「読む」ことと、「詠む」こと。日本語の「よむ」という言葉の両義性は実に示唆的です。「よむ」という言葉の両義性は、一見すると「読む」という受動的と思われがちな行為も、実は「詠む」という創造的な行為と密接に関わっている

ことを示しているのではないのでしょうか。

江戸時代の人々もまた、読むことを通じて詠む行為に導かれ、また詠むことによってさらなる読むことに駆り立てられて行く、そのような「よむ」ことの醍醐味を体験していたように思います。

今回の展示会が、「よむ」という行為の贅沢な楽しみを少しでも伝え得ていたとしたら、これに勝る喜びはありません。

次号の本誌では、連載の第3回として「みるきく楽しみ」を紹介する予定です。

(きどうら・とよかず)

平成18年度企画展「江戸の遊び - けっこう楽しいエコレジャー」「よむ楽しみ」展示資料リスト
印のあるものは、宮城県図書館蔵。他は全て東北大学附属図書館蔵。

○小説の楽しみ

- ・井原西鶴『世間胸算用』元禄5年(1692)
- ・山東京伝撰・葛飾北斎画『昔々桃太郎発端話』寛政4年(1792)
- ・十返舎一九『滑稽五十三次』(東海道中膝栗毛)
- ・十返舎一九(二世)『奥羽一覽道中膝栗毛』弘化5年 - 嘉永3年(1848 - 1850)
- ・式亭三馬撰・歌川国直画『浮世風呂』文政3年(1820)
- ・柳亭種彦撰・歌川国貞画『修紫田舎源氏』文政12年 - 天保3年(1829 - 1842)
- ・滝沢馬琴撰・柳川重信等画『南総里見八犬伝』文化11年 - 天保13年(1814 - 1842)
- ・為永春水撰・柳川重信等画『春色梅児誉美』天保3年 - 天保4年(1832 - 1833)

○豪華な本 - 奈良絵本と嵯峨本

- ・『ふんしやう』
- ・也足叟(中院通勝)訂『伊勢物語』慶長13年(1608)

○知る・調べる・学ぶ - 便利なハウツー本

- ・高井蘭山編・葛飾応為画『女重宝記』弘化4年(1847)
- ・『下学集』元和3年(1617)

○江戸の本屋

- ・『人倫訓蒙図彙』元禄3年(1690)
- ・葛飾北斎画『画本東都遊』享和2年(1802)
- ・中川芳山堂撰『買物独案内 江戸之部』文政7年(1824)

- ・葛飾北斎画『絵本庭訓往来』文政11年(1828)
- ・斎藤長秋撰・斎藤懸麻呂等校・長谷川雪旦画『江戸名所図会』天保7年(1836)
- ・乾坤坊良斎撰・尾上梅幸校・北尾重正画『傾城怪譚冬迺月』文政12年(1829)

○「奥の細道」と宮城の俳諧

- ・大淀三千風『日本行脚文集』元禄3年(1690)跋
- ・松尾芭蕉『奥の細道』寛政元年(1789)再版
- ・八椿舎康工編『俳諧百一集』明和2年(1765)
- ・瓠形庵一止編『さはひこめ』天保15年(1844)
- ・黒部素粒『俳諧松島行』文化11年(1814)

○天明狂歌の時代

- ・四方赤良等『万載狂歌集』天明3年(1783)
- ・宿屋飯盛撰・北尾政演画『吾妻曲狂歌文庫』天明6年(1786)
- ・萩屋裏住等『追善沈香記』[文化10年(1813)]
- ・六樹園判『忠臣蔵当振舞』[享和3年(1803)]

○川柳のおかしみ

- ・『絵本柳樽集』
- ・久多良図屋『根なし草四十八文字』[安政6年(1859)]

○回文師仙代庵をめぐる

- ・『郷土史談会報』第8号 昭和2年(1927)
- ・浅草庵市人『美知乃久布里』
- ・唐来参和撰・千代女画『巡廻能名代家莫切根金生木』天明7年(1787)

附 属 図 書 館 の 概 況

この概況は毎年実施される大学図書館実態調査のうち主な項目をとりまとめたものである。

表 1 は平成14年度～平成17年度の概況，表 2 は平成17年度部局別のものである。

表 1

区 分		平成14年度	平成15年度	平成16年度	平成17年度
蔵 書	和	1,865,844	1,892,573	1,769,031	1,805,460
	洋	1,818,812	1,822,816	1,844,161	1,866,550
	計	3,684,656	3,715,389	3,613,192	3,672,010
所蔵雑誌数	和	32,891	33,404	34,157	35,023
	洋	36,963	36,952	37,873	38,698
	計	69,854	70,356	72,030	73,721
年間受入数	和	35,948	41,768	36,907	36,622
	洋	26,439	24,922	23,418	22,553
	計	62,387	66,690	60,325	59,175
年間雑誌受入数	和	11,713	11,924	11,396	11,181
	洋	7,563	7,271	7,072	7,069
	計	19,276	19,195	18,468	18,250
奉仕対象者数	学 生	17,315	18,439	17,716	18,552
	教 官	2,645	2,589	2,026	2,643
	計	19,960	21,028	19,742	21,195
奉仕対象数 一人当たり	蔵書数(冊)	184.6	176.7	183.0	173.2
	年間受入冊数(冊)	3.1	3.2	3.0	2.8
	図書館資料費(千円)	44.3	42.1	43.8	43
図書館職員数	総 数	134	135	126	133
	専 任	65	64	62	65
	臨 時	69	71	64	68
図書館職員1人当り奉仕対象者数		149.0	155.8	156.6	159.3
図書館資料費(千円)		884,574	866,268	905,901	913,173

表 2

部局	蔵書(平成18年3月31日現在)				平成17年度受入冊数				17年度経費				施設(平成18年3月31日現在)								
	図書(冊数)		雑誌(種類数)		図書(冊数)		雑誌(種類数)		図書館資料費				運賃費 (千円)	座席数 (席)	述面積 (㎡)	種別室 スペース (㎡)	書庫 スペース (㎡)	収容可能 冊数			
	計	和	洋	計	和	洋	計	和	洋	計	その他	計									
本館	945,449	573,305	372,144	23,810	14,570	9,270	10,807	4,136	3,399	2,566	833	51,512	36,662	47,049	135,253	283,395	1,464	18,215	5,706	4,729	1,750,000
文学	447,670	290,223	157,447	2,393	1,291	1,102	6,556	2,235	1,246	684	562	46,408	21,289	0	67,697	4,302	0	68	0	12	5,000
教育	105,660	63,429	42,231	1,202	757	445	1,625	611	518	351	167	12,460	9,704	0	22,164	6,554	17	200	59	107	28,000
法学	273,870	124,691	149,179	1,867	1,087	780	2,235	2,233	1,075	604	471	42,193	17,663	0	59,856	14,917	24	630	35	510	80,000
館法実	6,360	6,203	157	60	59	1	2,506	153	61	60	1	3,651	364	0	4,015	7,227	2	198	10	135	20,000
経済学	383,076	199,384	183,692	3,606	2,242	1,364	2,677	1,763	1,877	1,304	573	14,961	31,891	0	46,852	21,846	23	259	46	162	27,000
生命	31,094	18,036	13,058	653	363	290	0	12	13	4	9	0	3,759	0	3,759	7,577	6	241	28	197	22,000
多元研	76,700	20,064	56,636	1,446	381	1,065	253	295	194	98	96	1,484	26,332	0	27,816	9,244	11	917	86	482	127,000
流体系	34,005	13,033	20,972	496	81	415	53	94	75	31	44	390	9,094	0	9,484	3,187	16	207	22	127	39,000
通研	38,821	11,121	27,700	960	384	576	580	938	367	190	177	5,325	18,646	0	23,971	12,499	40	579	86	381	41,000
サイコロ	5,728	870	4,858	100	8	92	1	26	10	0	10	0	2,698	0	2,698	3,304	4	98	12	44	5,000
アジア研	20,761	14,972	5,789	51	36	15	1,588	566	87	60	27	4,989	2,815	0	7,804	5,414	0	120	0	110	20,000
係小計	2,369,194	1,335,331	1,033,863	36,674	21,259	15,415	41,224	13,062	8,922	5,852	2,970	183,403	180,917	47,049	411,369	379,466	1,607	21,732	6,090	7,026	2,164,000
金研	80,102	17,439	62,663	1,429	437	992	259	772	343	189	154	13,007	30,598	0	43,605	29,219	30	534	154	253	65,000
中計	2,449,296	1,352,770	1,096,526	38,103	21,696	16,407	28,421	13,834	9,265	6,141	3,124	196,410	211,515	47,049	454,974	408,685	1,637	22,266	6,244	7,279	2,229,000
医学分館	415,805	160,280	255,525	14,708	4,939	9,769	3,033	3,117	3,235	1,736	1,499	12,981	128,935	0	142,919	110,566	431	4,476	687	2,384	520,000
北青葉山分館	359,748	72,857	286,891	8,664	1,845	6,819	814	3,052	1,983	735	1,248	9,697	116,918	0	126,615	62,216	318	3,356	1,140	1,310	309,000
工学分館	317,442	148,875	168,567	7,564	3,522	4,042	3,533	2,143	2,178	1,379	799	30,064	113,205	0	143,269	116,632	364	5,355	2,460	605	300,000
農学分館	129,719	70,678	59,041	4,682	3,021	1,661	821	407	1,589	1,190	399	4,662	40,734	0	45,396	31,254	105	1,279	317	418	119,000
小計	1,225,714	452,690	770,024	35,618	13,327	22,291	16,920	8,201	8,985	5,040	3,945	57,407	400,792	0	458,199	320,688	1,218	14,466	4,604	4,717	1,248,000
合計	3,672,010	1,805,460	1,866,550	73,721	35,023	38,698	36,622	22,553	18,250	11,181	7,069	253,817	612,307	47,049	913,173	729,353	2,855	36,732	10,848	11,996	3,477,000

会 議

学 内

19. 1.26 平成18年度第8回附属図書館運営会議
- ・協議事項
 - 1) 平成19年度総長裁量経費要求事項について
 - 2) キャンパス間資料搬送システムの実施について
 - 3) 総長室ヒアリングについて
 - 4) その他
 - ・報告事項
 - 1) 学術情報整備計画の改訂について
 - 2) 東北大学機関リポジトリ運用指針について
 - 3) 試験期間中における開館時間延長試行状況について
 - 4) その他
19. 3.26 平成18年度第9回附属図書館運営会議
- ・協議事項
 - 1) 平成20年度概算要求事項について
 - 2) 総長裁量経費の追加要求について
 - 3) 平成18年度自己点検評価について
 - 4) 二次情報データベースの購入案について
 - 5) その他
 - ・報告事項
 - 1) 井上プランについて
 - 2) 東北大学機関リポジトリ「TOUR」について
 - 3) 附属図書館本館の防災訓練について
 - 4) 平成19年度学術情報整備費(共同購入費)の負担率について
 - 5) 本館における試験期延長開館(試行)の結果について
 - 6) e-DDS Electronics Document Delivery Services(必要な文献を研究室等のパソコンから入手可能とするサービス)の実施について
 - 7) 本館の閲覧機, 椅子等の更新について
 - 8) キャンパス間資料搬送サービスの本実施に伴う運用について
 - 9) その他
19. 1.30 平成18年度第4回附属図書館商議会
- ・協議事項
 - 1) 平成19年度総長裁量経費要求事項について
 - 2) 学術情報整備計画の改訂について
 - 3) キャンパス間資料搬送システムの実施について
 - 4) その他
 - ・報告事項
 - 1) 東北大学機関リポジトリ運用指針について
 - 2) 平成18年度第3回, 4回学術情報整備検討委員会並びに学術情報資料選定小委員会(合同会議)について
 - 3) 試験期間中における開館時間延長試行状況について
 - 4) 総長室ヒアリングについて
 - 5) その他
19. 3.28 平成18年度第5回附属図書館商議会
- ・協議事項
 - 1) 平成20年度概算要求事項について
 - 2) 総長裁量経費の追加要求について
 - 3) 平成18年度自己点検評価について
 - 4) 平成19年度学術情報整備費(共同購入費)の負担率について
 - 5) その他
 - ・報告事項
 - 1) 井上プランについて
 - 2) 東北大学機関リポジトリ「TOUR」について
 - 3) 附属図書館本館の防災訓練について
 - 4) 二次情報データベースの購入案について
 - 5) 東北大学学術情報整備計画に関する申合せの改定について
 - 6) 本館における試験期延長開館(試行)の結果について
 - 7) e-DDS Electronics Document Delivery Services(必要な文献を研究室等のパソコンから入手可能とするサービス)の実施について
 - 8) 本館の閲覧機, 椅子等の更新について
 - 9) キャンパス間資料搬送サービスの本実施に伴う運用について
 - 10) その他

人 事 異 動

平成19年 3月31日現在

発令年月日	新 職	氏 名	旧 職	備 考
19. 3. 31		及 川 恵美子	工学分館整理・運用係長	定年退職
"		吉 川 文 子	医学分館運用係	"
"		菅 原 育 子	工学分館整理・運用係	"
"		鈴 木 里江子	事務補佐員（総務課 会計係）	任期満了
"		佐 藤 直 美	事務補佐員（情報管理課 図書情報係）	"
"		菅 原 愛 子	事務補佐員（情報サービス課 参考調査係）	"
"		寺 窪 尚 子	事務補佐員（情報サービス課 閲覧第二係）	"
"		相 澤 圭 子	事務補佐員（金属材料研究所 図書係）	"

人事異動の訂正

10.25 事務補佐員（北青葉山分館整理・運用係）採用

正 鈴木悦子 誤 千葉悦子

編 集 後 記

仕事から、使用済み切手が手元に集まります。これを人づてながら寄付するという人道的な活動を行っておりますが、あえて使用済みのものに価値を見出す世界もあるわけです。

手元に集まる切手は国際色豊かで、欧米はもとより中近東やまれに中国などもあります。図案は王族の肖像や国立公園、動物などが多いですが、受付印も多彩です。丸で囲んで日付というおなじみのパターンもありますが、日付もなくただの波模様であったり、大きく「HAPPY HOLIDAY」とだけ押されたものもあります。

前号掲載の「漱石文庫の保存修復」では、資

料の世界でも、「使用済みでも価値がある」のではなく「使用済みゆえに価値がある」世界の一端を垣間見ることができます。今回同じ小川先生の手になる「中世後期手写本制作」では、さらに資料自身の語る世界が生き生きと紹介され、研究者でなくとも大変興味深い読みものとなっています。

今年度も終わりへ近づき、先日人事異動の内示もありました。職員のなかにも、寄稿の常連で東北大を去られる方がいて、編集委員としてはさびしいかぎりですが、来年度もまた「木這子」をよろしく願い申し上げます。

東北大学附属図書館報「木這子」 第31巻第4号（通巻117号）発行日 平成19年3月31日

発行人 北村 明久 広報委員会委員長 菅原 英一

発行所 東北大学附属図書館 〒980-8576 仙台市青葉区川内27-1 電話 022-795-5911, FAX 022-795-5909

URL <http://www.library.tohoku.ac.jp/>